

今月の御教え

若死にをすると、みな嘆いて心を苦しめるが、稲にも、早稲、中手、晩稲とあるようなもので、早く死んでも、子供ができてから死ぬのは、早稲のようなものである。まだ子のないのに死ぬのは、実らない白穂になったのと同じである。死ぬということは、もみを白でひいた時、殻と実とが分かれるようなものである。時が来れば魂と体とが分かれるのである。

……「天地は語る」第六十七条……

解説 ある篤信のご信徒が「わが家に不幸が続いたことがあったが、前もって教祖様

から教えを頂いていた」と述べておられます。その「教え」が、この御理解であります。

教祖様ご自身も、次々とお子様方が夭折され悲嘆にくれましたが、その悲しみを乗り越え一層、神信心に邁進される中に遂に天地の親神様に出会い、天地の道理を知らされ「人間の死」ひいては、お子様方の早世の理をも知り、深く納得されたのでした。それで教祖様は次に、このご信徒が、同様の難儀に出会う前に、神様からお教え頂いた、難儀の受け止め方を、当時の人々がよく分かる稲作になぞらえて「人は死ぬと魂と体が分かれて、身体は地に帰り、魂も元の神様のところへ還っていく」ことを、懇切に教え諭されたのであります。